

青年期における「老い」に関する臨床心理学的研究
Research of Clinical Psychology on “Aging” in Adolescence

研究代表者 西田 麻衣子 (D2) 教員 伊藤 良子
研究分担者 原田 宗忠 (D3) 笹倉 尚子 (D2) 久保田 昌子 (M2)
研究協力者 高橋紗也子 (M1)

〔研究目的〕

我々は高齢者を対象とした心理実践とカンファレンスを続けてきた。カンファレンスでは京都大学名誉教授でありヘルメス研究所所長の山中康裕先生にもご指導をいただいていた。その中で議論となった問題の一つに、セラピスト自身が「老いる」存在であることをどのように捉えるかということがあげられる。その問題はセラピストとクライアントがいかなる関係を築くかにも大きく影響すると考えられた。

このように老いの問題を単に年を重ねるという次元ではなく、「いかに老いるか」というところの次元から捉えた場合、老いは老年者に限った問題ではなく、あらゆる年代が抱える課題となりえる。こうした問題意識を背景に、我々は「老い」に関する研究を行うことにした。

対象には青年期を選んだ。青年期は、アイデンティティを確立し、自分の人生の方向付けを決める重要な時期である。その際、自己の有限性へとつながる「老い」の意識から自らをふりかえり、人生を選択していく可能性も考えられよう。つまり、「老い」の意識が、アイデンティティの形成や人生の決定に重要な影響を与えている可能性があると考えたからだ。

よって本研究では、従来あまり注目されてこなかった「老い」の側面、つまり自己の有限性への意識という視点から、青年期において、人が「老い」をどのように体験し、どのように捉えているのかについて検討することを目的とした。

次に昨年度の研究の発展として以下の二点の研究を行うこととした。ひとつは、第8回日本認知症ケア学会大会（2007）で発表した内容を、再検討した上で、日本認知症ケア学会誌に論文投稿することである。もう一点は、質問紙調査によって得られた知見をもとに、個別のケースについての検討を行い、知見を深めることである。

〔研究経過〕

青年期における「老い」の調査に関して、まず我々が漠然と共有する「老い」のイメージを洗練させるために、日本内外における先行研究を広く読み整理した。その上で大学生 44 名を対象に調査を行った。調査では「他者の老い（あなた以外の老い）」と「あなたの老い」それぞれについて、感じたことがあるかどうかの有無、そのエピソードとイメージの自由記述および 7 件法による「老い」への態度に関して質問紙を用いて尋ねた。「老い」への態度に関する質問とは「私にとって、老いは否定的なものだ。」「私は、老いを好ましく感じる。」等、「老い」への肯定感－否定感を問うものを含んでいる。また、質問紙に回答した 44 名のうち 32 名から面接調査への協力を得、言語・非言語の両方によって「老い」のイメージを表現してもらう半構造化面接を行った。具体的には「老い」のイメージに合う色を 50 色クレヨンから選択してもらい選択理由を尋ねた（色選択法）。また描画を用いて「老い」イメージや「ひと」と「老い」の関係を尋ねた。

次に日本認知症ケア学会誌への論文投稿については、James (1892) による主体的側面を意味する「I」と客体的側面を意味する「me」との観点から再検討を行い、また他領域の専門家からも意見をもらい文章を洗練させた。個別ケースの検討については、ケース・カンファレンスの場を設け、意見交換を行ってきた。また、そこで得られた知見が、他の職種、例えば、医師や看護師、介護職などの人達にどのように伝えれば役に立つのか、ということも議論した。

〔研究成果〕

まず青年期における「老い」調査で行った色選択法については、質問紙レベルの回答とは質の異なるデータが収集できた。その理由として、色彩によって喚起される情動的な動きと、クレヨンの持つ退行的な作用などが影響していると考えられる。この色選択法については我々が独自に考えた方法であり、さらに検討を加えて洗練させていきたい。また描画については、今後個別性を重視しながら検討を重ねていく。特に「ひと」と「老い」の関係では内－外の次元や自己との関係、さらには老いの受容の問題と関連した考察をしていきたいと考えている。調査の結果の分析はこれからの課題であるが、以上の点を踏まえたうえで検討を加えていきたいと考える。

次に、論文については日本認知症ケア学会誌に論文を投稿し、掲載予定である。個別の事例を細かくみていく質的な側面を重視した研究では、その成果を第 9 回日本認知症ケア学会大会（2008）で発表した。

以上が今年度の活動の概要である。基本に臨床活動があり、そこから見出された「老いる」というテーマを研究につなげていったように思う。これは「体験」を「知」へと結びつける姿勢であり、「臨床の知」の探求へとつながるものだと考える。